

《論文》

# 神の國は斯くのごとき者の國なり ——立教小学校校長としての歩み——

佐々木 正

## 1 はじめに

公立小学校の教師退職後、2年を過ぎようとしていた11月のある日の夕方、毎年行っている定期検診を終えた病院の前で1本の電話を受け取りました。それは「立教小学校校長として仕事をしてもらいたい。」という内容でした。

キリスト者の私にとって小学校教師であることは、一つの献身の姿でした。中学生の時に聖書に出会い、高校生の時に洗礼を受けて以来、生涯を通して自らの信仰を大切にしていこうと心に決めていましたが、将来の仕事に関して明確な未来像を持っていたわけではありません。ただ、教会のため海外伝道のために役立つ仕事ができれば素晴らしいと常々思っていました。そこで、大学卒業後神学校に進むことがよいのではと漠然と考えていました。そのため大学では哲学、プロテスタント神学などを学ぶ素地としてドイツ語、ドイツ文学の学びをしようと決めました。進路について相談に乗ってくださった当時所属していた教会の牧師先生もドイツ文学科を修了されてから、神学校に進まれていました。

大学は立教大学文学部ドイツ文学科に入学しました。毎日のドイツ語の学びは厳格な文法などの決まりを記憶しなければならないことが多くありましたが、新鮮で大変興味深いものでした。そんな学校生活を送りながら、ある日、将来の職業に関して考えるきっかけと出合いました。それはテレビで放映された教師一人児童一人の小さな山奥の分校のルポルタージュで

した。私はそれまでにない大きな衝撃を受けました。熟考の末、小学校教師になるための道をあれこれ模索しました。立教大学文学部教育学科に小学校教師の免許が取得できる初等教育専攻課程があることを知り、ドイツ語の学びに加え編入試験の準備を始めました。幸い編入が許され、小学校教師になるための学びを始めることができました。

高校まで受けてきた学校教育は競争と選別の場所のように思えて、いつも居心地の悪さを感じていた私にとって、それまで教師の仕事にあまり魅力はありませんでした。しかし、ルポルタージュで知った学校、教師の姿は私の経験してきた学校とは真逆のものでした。その上、立教大学教育学科で出会った学識深く自由で個性的な先生方、学生の自由を尊び個を尊重する立教大学の風土は私のせまい学校観、教師観を打ち壊してくれました。思い返すと教育学科の先生方の言葉は、含蓄に富むものばかりで私にはすぐには理解できないことが多くありました。教育実習の参観後にいただき、私にとって終生座右の銘となった上田薫先生からの言葉の真意が理解できるようになったのは卒業し教師となり、だいぶ経ってからでした。

改めて考えてみると、言葉を身につけるための学校の役割は大きなものでした。中学生時代に聖書に出会い読み通し、考え、祈ることができたのも学校での学びが基にあったからでしょう。小学校教師の仕事の中心に母国語の指導があることに深く気づかされました。そして、私の献身は幼い子どもたちにしっかりと言葉を教え、いつの日か聖書を読む機会が生まれたときに神さまのメッセージを素直に受け取れるように指導することだと思うようになっていきました。

## 2 立教小学校との出会い

### (1) 聴く・学ぶ

お話をいただいてから立教小学校校長としての役割と勤めについて思いを巡らしました。まず、70年にならんとする本校の歩みをしっかり理解し尊重すること、現在の本校を支える教師一人ひとりの尊重と、教師集団

の状況を受け止めることから始めました。

### ①資料との出会い

学校の歴史の理解を深めるために、設立当時の文書資料を読むことから始めました。10年ごとに記された周年誌とそのほかの書籍類は大変よく管理され、詳しく読むことができました。1948年の第一回生入学礼拝の際に保護者に配られた貴重なPTA通信もありました。ガリ版刷りの文字で、本校の第一日目をともに過ごした1回生の子どもと保護者、学院関係者、教職員の喜びが伝わってきました。1957年5月3日発行の「立教小学校十年史」からは戦後間もない時代の開校準備、校舎建築、行事の創造など徐々に形を整えていく様子とともに、立教学院再興の先頭を切ろうとの熱い思いが読み取れました。中でも、設立時の実質的なリーダーとして、後に第三代校長となる有賀千代吉先生の学校日誌からは、戦後の混乱、物資不足の中、ただ神さまを信じ営々と課題解決に取り組まれた努力の様子がひしひしと伝わり私の心は強く動かされました。

十年誌の中で初代校長佐々木順三先生は「立教学院の宗教教育は、小学校を設けることによって地に根をおろした木のごとく力強く育つことであろう。(中略)私は松崎理事長と、立教学院の中に小学校を設けることを定め、昭和22年9月25日の理事会にこれを諮って、全員の賛成を得たのである。」と語っています。キリスト教信仰を再建の柱として立教学院の再出発と戦後民主主義教育の本流として屹立せんとの高い理想を掲げた方々に深い敬意の念を持たずにはいられませんでした。

### ②教師との出会い

教師の第一印象は全体的に明るく朗らかな方々が多いように見受けられました。卒業生が教師となり、かつての恩師と共に勤務している方もいます。全員の連携・協力関係は大変良好に思えました。毎朝の教職員朝礼では聖書のみ言葉を全教職員で聴き、全教職員で祈ります。キリスト教教育を掲げる学校としての素晴らしい習慣でした。

私は、一人ひとりの教師が、自由にのびのびと主体的に仕事を進め、謙虚に子ども、他の教師、保護者などから話を聴き、学び合いながら成長していくことが学校の成長である、と考えてきました。そのためには管理職を含む教師が一人ひとり自律し、互いの自由を尊重し合い、謙虚に学び合う風土の存在が重要です。優れた教育活動が生まれるためには、専門家としての教師一人ひとりにとってやりがいのある、居心地のいい場所が必要なのです。

ほとんどの教師が本校に採用されてから定年退職まで勤務したいと考えていました。そのような教師の集団は、まとまりが良く、行事などでの協力体制などは実に見事です。先輩教師と若手教師の交流は盛んで、若手教師の質問や相談に丁寧な答える姿が見受けられました。これらのよさの源は私立学校教師の長所といえるものだと思います。子どもの成長を6年間通して見取ることができる教師にとって、本校は大きな家族として育まれているようにも見えました。

## (2) 高め合う

設立時の状況がわかる多くの文書とともに、近年行われた教師アンケートを熟読しました。本校の将来について様々な考えを聞くものでした。教師の真摯な意見が多数記され、未来を共に作り出そうとの気概は、草創期の教師同様だと感心しました。その中には少なからず現状の改善、改革を期待する声もありました。長い時間をかけて培われてきたことを改善、改革することは、決して容易ではありません。そうこうしているうちに徐々に私の使命がはっきりとしてきました。本校との関わりが全くなかった私が校長として、歴史と教師の思いを可能な限り受け取り、洞察し、本校教師とは別の視点から学校の現状をとらえてさらなる発展に向け、守ることと変えることを的確に判別し、リーダーシップを発揮することを期待されていると考えました。

私はキリスト者、教育者としての今までの経験から、学校を見る視点は

三つに集約されてきました。子どもたち、教師一人ひとりが尊重され、敬意を払われているか。子どもたちが聴き合い学び合い高め合う集団になっているか。そして、教師が聴き合い学び合い高め合う集団になっているか。この三つを整えることで学校は誰にとっても安心して努力し、挑戦する場所、親切や思いやりが生まれる場所になるのです。

三つの視点をもって本校の教師集団をとらえ直すと、まとまりのよさも単に好ましいとだけは言えない部分があることに気づかされました。与えられた役割を黙って行う姿は、先輩教師に対する遠慮から声を出さないだけかもしれないのです。時間の経過とともに、守り続けることと、よりよい学校のためには変えたほうがよいと思えることが徐々に明確になってきました。しかし、外部から着任した校長の私には長年続けてきた教師たちを困惑させないように、丁寧な説明と協議のための時間が必要だと考えました。本校教師たちがこれまで積み重ねてきた教育活動に敬意を払い、一人ひとりの教師を尊敬し、率直に話し合い、納得の上で真の改革は始められるのです。急激な変更は、急激な揺り戻しを引き起こしやすいものです。

着任の少し前、初めて教師に紹介された席で私は「『わからない』が言える教員室にしましょう」と語りました。私立学校教師は公立学校のような異動が無く、長く勤務する場合が多いため学校愛にあふれた和気藹々とした雰囲気がありました。その一方で先輩教師と後輩教師との関係性が自然と固定化し、自由な意見交流を阻害する要因ともなりやすいものです。こうした中に外部から風を通すのが校長としての私の役目ではないかと考えるようになりました。私の第一声は、プロとしての教師集団が先輩後輩やかつての師弟関係などにとらわれず、互いに「弱さ」でつながり合う関係を作ることが最も大切であるという思いを込めたものです。「わからない」が言える教員室から「わからない」が言える教室が生まれるのです。教育という営みは深く広く複雑です。教育実習の指導教員であった上田薫先生からいただいた「割り切って安定してしまわぬように。」という言葉は、私の教師人生の座右の銘でした。教師はその職を辞するまで安定してはな

らないのです。「わからない」と呻く必要があるのは子どもではなく教師の方なのです。

私が本校の校長として進める方針の三つの柱がこうして徐々に明確になってきました。一つはキリスト者教師としてキリスト教学校の発展に資すること。次は、本校の設立理念、教育目的の伝承、継続、発展に資すること。最後に、教師、子ども、保護者三者が互いに学び合う「学びの共同体」の創造と発展に資すること。この三つです。

### 3 立教小学校の未来に向けて

#### (1) キリスト者校長として

##### ①教職員朝礼・月曜朝礼で

毎日教員室で行われる教職員朝礼の最後に校長が話す機会がありました。そこで2・3分の時間を使い、毎日キリスト教信仰を持つ校長として話をしました。昨日の出来事、子どもとの一コマ、その日の予定に対する校長の思いなど話す内容は千差万別です。

「寒い朝の日、朝の挨拶のために門に立っていた私に一人の子どもが近づいてきました。そして、急に私の手を取ると手袋をしている手で私の手をさすり始めたのです。はじめ私はびっくりしたのですが、少ししてはっと気がつきました。『私の手を温めてくれたのですね。』と問うと、すでに靴箱に向かっていたその子は、背中をむけたまま小さくうなづきまた歩いて行きました。」日々の些細な子どもとのやりとりの中に感じた思いやりや優しさを多く話すように心がけました。また、人知れず校内の端に咲くバラの花や、まだ寒い朝校内の梅の花が開いたときにも必ず話をしました。その日のうちに子どもたちを連れて花を観察する学級もありました。朝の気ぜわしさの中で、ほんの少しでも一人ひとりの教師とともに「愛し合いなさい。」という言葉を大切にキリスト教学校に遣わされていることに深い喜びを感じたいと願っていました。

話をするため毎日メモを手帳に書いていましたが、話すことがない日は

一日もありませんでした。子どもたちから教えられること、人々の思いやりや優しさ、本校の日々の営みなど、話のためのメモを書きながら私の周りには豊かな恵みと感謝する対象があふれていることに深く気づかされるが多かったからです。

このような何気ない日常生活の話を織り交ぜながら、月曜朝礼における校長講話では学校目標などを子どもたちにわかりやすく話すように努めました。神さまに喜ばれる子どもとしての自覚と感謝の気持ちのあふれた子どもに育てたいと願っていたからです。2年目からは校長講話をそのまま「校長室だより」として保護者に配布しました。ご家庭と学校が思いを一つにして子どもたちを育てる一助になればよいとの思いからです。

## ②人権教育

毎月開催される教職員会議の冒頭で主に直近の学校運営に関する校長の考えを伝えていました。しばらくしてそれら仕事上の話の前に、「人権教育」に関する話をするようになりました。それには二つの理由があります。本校教師にとって「人権教育」という言葉は聞き慣れないことに気が付いたことと学校全体で言葉遣いに課題があるように思えたからです。私は教師として過ごした中で、わが国の学校における人権尊重の精神はまだまだ不十分であり、さらに進めていかなければならないと強く考えていたところでした。そして、キリスト教学校こそ「人権教育」の先進的な役割を担うべきではないかという思いがありました。

私は長年の経験から学校内で交わされる子ども同士、教師の子どもに対して、教師同士の言葉の状況が、その学校の人権感覚の現状を表す指標になると考えるようになりました。特に教師の言葉遣いは毎日接する子どもたちに影響を与えます。いじめの遠因となる場合もあるのです。校内の言語環境の整頓は子どもたちの心の成長にも大きな関係を持っています。

本校で聞かれる言葉が格別にひどいというわけではありませんが、子ども同士、教師同士そして教師と子ども間の距離が近すぎるゆえに、ともし



ると乱雑になっているように見受けられました。小学校教師の場合、親密さを表すためになれなれしい言葉を使ってしまふことがあります。幼い子どもといえども、それぞれに尊い人格を持った存在です。相手は子どもだからとの気の緩みから出る些細な一言が、子どもの人格を傷つけることも多いことを教師は自覚しなければなりません。そして、無意識に使っている教師の言葉を子どもは手本とします。

公立小学校ではすでに男女混合名簿が一般的であり、授業中は男女ともに名前の後には「さん」を付けて呼び合い、名前の呼び捨ては姿を消しつつありました。私が本校に来てから最も違和感を感じた点はこのことでした。私は立教小学校着任当初から子どもの名前は今まで通り「さん」を付けて呼んでいました。「さん」をつけて呼ぶことでそれに続く言葉も丁寧になります。小さなことですが子ども一人ひとりの尊重、男女格差の解消など、相手を思いやる学校における人権教育の第一歩はここから始まるのだと思います。

名前の呼び方について教職員会議で話した折に、関係の深い「人権教育」について話を広げていこうと考えました。東京都の公立小学校では、毎年「人権教育ハンドブック」が教師全員に配布されるようになりました。このハンドブックは私立学校には配布されておらず、私が紹介をして本校教師はその存在を初めて知ったようでした。そこで、東京都の人権課題の中から「子ども」に関する様々な課題を抽出しながら教職員会議の冒頭で話したり、ワークシートを作成、配布し教師一人ひとりが自らの人権感覚について自覚したりする機会を設けました。人権は神さまの愛が基にあります。ですから、始めはキリスト教学校である本校では、改めて重視しなくてもよいのではないかと躊躇していました。しかし、教師自身の人権感覚と子どもたちに対する人権教育が最も進んだ学校になることこそが、神さまによろこばれる子どもの育成を掲げる本校の姿であるとの思いで、「子どもの人権」を中心に「ハラスメント」や「女性」などの人権にかかわる話を続けました。



### ③道徳性の教育全体構想図

2017年に小学校の学習指導要領が改訂されました。その中ですべてのキリスト教学校が不安に感じたことが、道徳教育の充実という名で示された道徳の特別教科化という問題でした。しかも、他教科の実施に比べ道徳に関してだけは2年前倒しして2018年度から完全実施することになりました。それまでの教育課程の編成に関しては、「道徳」の学びを私立学校においては「宗教」（本校では「聖書」と称しています。）に変えることが認められていました。しかし、学習指導要領の改訂により「道徳の時間」が「特別の教科道徳」として教科化されたことにより、「宗教」が今まで通りの進め方で続けられるのかと各校が憂慮したのです。

本校が加盟するキリスト教学校の団体も事態を重く受け止め、様々な努力が重ねられました。その一つが、各学校が「宗教」の時間において指導している内容や、他教科との関連、行事などを含め、すべての教育活動において行っている道徳性の育成と、特別の教科道徳の指導内容とを関連づけることでした。そのこと自体は、それぞれの学校の「宗教」の時間の省察につながり、子どもの道徳性の育成に対する責任と各学校の創立理念に思いをはせる機会となる貴重な時間となりました。結局、今まで通り私立学校の教育課程に関しては「宗教」の時間をもって道徳に変えることが許容されました。

私はこの一連の流れは本校にとって見逃してはならない絶好の機会であると考えました。

「宗教」の時間の学習を始め、各教科、学校行事、日々の生活など本校のすべての教育活動を通して神への感謝、人への愛と謙遜の心の育成が図られているかを丁寧に見直すことが求められたのだと理解し教師に伝えました。また、「宗教」の時間だけで道徳性が養われるのではなく、すべての教育活動において全教師に本校の子どもたちの道徳性の育成に対する大事な役割があることに理解と自覚を求めました。

そして、本校のすべての教育活動と道徳性の教育との関連が明確になる

ように図式化した「道徳性の教育全体構想図」（表1）を作成、提示しました。全体構想図の中心には創造主への畏敬の念、聖書を尊び、学ぶ姿勢、感謝と祈りの励行を通して道徳性を育成することを明確にしました。この構想図により、神さまから愛されている、恵みを賜っていることの信仰が、深いところで子どもたちの道徳性を支え育てることを明らかにし、示したいと願いました。

#### ④子どもを大切に作る学校づくり 10 項目

私立のキリスト教学校に子どもを預ける保護者の心情は様々だと思いますが、「いじめ」のない学校、あるいは「いじめ」に対して真摯に対応してくれる学校という思いが強いのではないかと考えていました。キリスト教学校であるならば、問題が起これば親身になってくれるだろうと期待する保護者の気持ちは容易に想像できます。それでは本校に「いじめ」などの子どもの人権侵害は全くないかといえば、そうではないであろうと考えながら私は着任しました。子どもが集まるところで起こることは、公立小学校も私立小学校も大差ないと考えた方が現実的です。公立校の経験を生かして 2016 年から毎学期に一度、すべての子どもを対象として新たに始めた「いやなこと、気になることアンケート」の結果では、深刻ないじめこそ無かったものの、いやなこと、やめてほしいことなどの子どもの声が少なからず聞かれました。

「いじめ防止基本方針」は本校でも作成されていました。キリスト教学校として保護者の期待に応えられるように毎年担当者と見直し、改訂し教職員会議で周知徹底を図ることにしました。さらに校長として「いじめ防止対策で大切なことは、子どもと日々接する教師の鋭い人権感覚と子ども一人ひとりに寄り添い、何気ない言動から子ども理解を深めることです。それは、全教師が全児童の担任であるとの意識を持ちアンテナを高く伸ばし、言葉だけでなく、表情や行動、日記などを含めて『子どもの発する声を聴く』ことであり、本校が表明してきた愛の教育の出発点なのです。」

と繰り返し語りました。その上で「最も大切なことは、すべての子どもに学びの楽しさ、友と学び合うことの楽しさ、そして、自分の学びが誰か、何かの役に立つことのうれしさを味わわせることなのです。」と伝えました。

以上の考えを基に、基本方針とは別にすべての子どもたちが学びに熱中、没頭し、友と共に学ぶことを楽しむ学校、互いに話を聴き合う学校を目指し、10項目の具体的な取り組み内容を定め、「子ども一人ひとりを大切にする学校づくり」と名付け教職員会議に提案し了承されました。その内容は、以前から本校で取り組まれていた実践を再評価して取り組むことにしたり、改善の余地があると考えた教師の研修体制、授業研究を改革したりしたものです。ほかにも、過去の教師アンケートの結果や私の勤務経験から学んだ事柄から本校に役立つと考えたことを取り入れて10項目にまとめました。実施後は次年度に向けて校務運営会議において反省、検討を行ってきました。

## (2) 伝統の継承と発展

### ① 日記指導の重視

1948年4月6日本校第一回の入学礼拝の日に保護者に配布されたPTA通信には、巻頭言に続いて「絵日記について」と題して、「絵日記は毎日つけましょう。」から始まる10項目の留意点が述べられていました。本校の日記指導はこの日から連綿と続けられ学校の特色となりました。他にも「日記は子どもから親や教師へのメッセージでもあり、コミュニケーションの一つの手段である。」との至言も載せられていました。このことは、立教大学での学びから教師生涯を通じて大事にしてきた生活綴り方的な教育方法に通じるものであり私にとっては我が意を得たりといった気持ちでした。改めて学校全体で行う日記指導の教育的価値について言及し、教師の意欲を高める方途を探り実践してきました。

この手法は教師にとってはごまかしが利かず、容易なものではないこと

を私自身が一番よく知っています。毎日の日記に目を通して教師の言葉を添えることには、相当の時間がかかります。深く考えたことや、つらい思いなどが書かれた日記には、通り一遍のコメントでやり過ごすことなどできません。提出した証拠のスタンプやシールで済ますなら時間はかかりませんが、それでは本校が大事にしてきた日記指導とは言えません。日記指導では、子どもを励ます、それ以上に教師を励ますことが必要なのです。

私は日記を通して見える子どもの生活、考えや思いを教師と共有するように努めました。一人の子どもから紡ぎ出された言葉は唯一無二のものであり、そこに触れる小学校教師の仕事の醍醐味は計り知れません。子どもたちの日記は教師にとって学びの宝庫なのです。また、保護者の集まる機会に、子どもたちの生活がうかがい知れるように、積極的に紹介しました。子どもたちの日記の紹介になると聞く方々の空気が急に柔らかくなるのです。素直な内容に感激する方々も多くいらっしゃいました。そのような中で、校長講話では、日記を書くことのすばらしさを子どもたちや保護者に向けて伝え続けました。

その後、一日一学級 40 人分の日記を読み、校長の言葉を書き添える機会を得ました。最初は卒業する 6 年生一人ひとりと日記を通して関わりたいとの思いから、6 年生の 3 学級のみから始めたのですが、その後、2 年生以上の 15 学級の子どもたち全員の日記を読み、短く感想などを書かせてもらいました。私も学級担任のときには毎日行っていたことを、しばらくぶりに再開でき楽しい時間を過ごすことができました。同時に、限られた時間で毎日行っている本校の教師たちの努力に、あらためて感謝と敬意の念を抱きました。これらのことから、本校教師が営々と努力を続けてきた日記指導の重要性を共に理解していきました。

## ②新しい男子校教育

本校は我が国の小学校としては男子教育に特化した大変希少な存在です。様々な設立時の状況の中で選択されたこの体制を変えることなく歩ん

できました。私はこの学校の校長としての話をいただいた時に多少の心配がありました。男子だけの小学校ゆえの厳しさ、質実剛健、日常的な競争、個より集団、乱暴な言葉による支配、などといった古い体質が残っているのではと危惧していたからです。多くの学校に今も根深く残る私の強く嫌悪する体質です。

しばらく本校の様子を観察すると、校内での大声やテストの点数競争といったどの学校にもありがちな点は気になりましたが、それは当初心配していた程ではありませんでした。後に保護者向けの文書の中で有賀千代吉先生は「如何なる場合に於いても決して腕力を振るってはならない。」「現在の日本においては、女性よりも、より以上に男性が、自分の秀でているという観念を捨てなくてはならぬと思います。」とのお考えを伝えていました。設立時から本校が男らしさや強さを重視し、競争に勝ち、男性優位の社会で成功するための男子教育を目指したのではなく、男子に対する人間教育、戦後民主教育の先頭を切る学校作りを目指して設立されたことを知り、不安は払拭されました。

しかし、長い歴史の中で培われてきた習慣を正すことは決して容易ではありません。いまだに、社会に出ると男には七人の敵がいる、競争に勝たなければならないと考える人々も少なくありません。男性優位の間違った考え方は、つい最近まで日本社会が容認し、学校もそれに追随してきました。民主主義社会前進のため小学校に託された責任は決して小さくはないのです。子どもを「おまえ」と呼んだり、「男らしく」という言葉を平気で使っている教師は、将来の日本のために変わらなければなりません。

本校への入学を考えている保護者からは、男子だけの荒っぽい世界でやっていけるだろうかと心配する方の声が未だに聞こえます。そのような声に対しては、設立当初からのキリスト教信仰に基づく教育の意味を伝えるよい機会と捉え、本校は男子に対する愛の教育、人間教育を実施し、最も弱い人、悲しんでいる人に寄り添う知恵と勇気と素直な心を育む場所です、と話してきました。そのことは教職員会議の冒頭に与えられた時間に

取り上げた「人権教育」の中でも幾たびとなく語り続けました。

時と共に教師も子どもたちも少しずつ言葉遣いに変化し、大声で呼び合うことも減少し、穏やかな言葉、優しい言葉が増えてきたように感じられ大変うれしく思いました。キリスト教信仰に基づく人権感覚に敏感で、弱い人、悲しんでいる人、困っている人を決して見捨てない勇気を育てる新しい男子小学校の姿を我が国に、世界に輝かせたいと願っていました。

### (3) 学びの共同体の創造

#### ①校内授業研究の促進

小学校教師の仕事の中心は授業であることに変わりはありません。子どもたちの学校に対する満足感を授業でこそ味わわせたいと願ってきました。そのために生活綴り方式的な教育手法を続けるうちに、学校教育の主活動としての授業は「子どもから出発し、子ども同士で学び合い、誰かの、何かの役に立つ」ものと考えようになりました。その大きな妨げが子ども同士の競争と教師が用意する 100 点を目指すテストです。我が国の学校教育も改革の必要性が語られて久しいですが、教室の中では依然として 100 点を目指した記憶を中心にした「勉強」が子どもたちに求められています。結果として教室は点数による序列化が無批判に行われる空間のままです。しかし、世界の学校改革、授業改革の中心は「学び合い」による全員参加の授業でした。誰もが共に賢くなれるこの取り組みを私は公立校で実践し、その効果はとても大きいことを経験していました。

立教小学校でも授業がどのように行われているかは私にとって大きな関心事でした。まず感心したことは、教師が所属する教科別の研究会を実施し、ある教科部会では全員が年に 1 回は授業公開をしていたことです。全員で行う年に 1 回の授業研究会や、立教大学教育学科の教師とともに行う合同研究会も開催されていました。多くの教師は、真摯に授業改革をめざしたいと考えているようでした。また、近年の授業研究テーマには「学び合い」の言葉が入っていました。このような本校の授業研究に対する状況



から、さらに授業改善、授業改革につなげていくことができると判断し、いくつかの提案を行い実施していきました。授業研究の核心は、子どもが一人残らず学びに熱中、没頭して共に学び合い高め合っているかについて教師一人ひとりの見え方を率直に出し合い、検証することが中心であることを研究授業参観後の協議会で語ることから始めました。

また、大きく変える必要があると考えたことの一つは、児童の机の位置です。着任初日、学校内を一巡して始めに驚いたことは、1年生から6年生まですべての学級で一人ひとりの机が独立して整然と置かれていた姿でした。その姿は「一人ひとりががんばれ、競争に勝て。」というメッセージのように思えました。

「学び合う」学びに関して授業研究会などで子どもの学び中心の授業観を語っていくうちに、徐々に、学級の机の配置が変わっていきました。学習の内容や取り組み方によって2人組になったり、4人組になったりして授業を進める教師が増えていきました。同時に、授業内容も子どもの学びを中心に置くことで、教師の想定をはるかに超えた考えや子どもたちの興味の広がりが見られるようになってきたとの報告を受けるようになりました。また、毎日の日記にその日の学習を楽しんだ気持ちや、帰宅後さらに思いついた考えを書いてくる子も見受けられるようになってきた等のうれしい報告もありました。

それらの日記を読ませてもらいながら、授業改善が学校改革の本道であり、子どもたち一人ひとりを尊重する人権教育の核となることを改めて思い知らされました。その後、年間の全員授業研究会を3回に増やしたり、教師の学び合いが生まれることを願い、授業研究への積極的な参加を促したりしました。校務運営会議のメンバーも授業改革に対する役割を積極的に担い、授業研究を専門とするW大学K教授を通年講師として招聘してくれました。こうして、すべての教師が学び合いながら校内の授業改革が動き始めました。

## ②他校から学ぶ

私立学校の教師は他校の授業を参観する機会が極端に少なく、授業イメージが固定化していることを感じ、その機会を増やす方策を考え実行しました。私も所属し研究を深めてきた豊島区立小学校教育研究会への参加と授業改革先進校への出張授業参観の勧めです。

豊島区立小学校教育研究会は豊島区の公立小学校教師によって構成され、全員がそれぞれ研究を深めたい教科や領域の部員となり、学校の枠を超えて研究を進めている集まりです。そこに私立学校が参加希望を出すことなど思いもよらぬことだったと思います。私自身合わせて22年間お世話になった豊島区の教師時代にこの研究会は、他校の現状から学んだり、教師の知り合いの輪を広げたりと大変有意義な会でした。また、北区立小学校教育研究会では、副会長、会長を任された時から教育の進展、我が国の教育の改革のためには公立、私立などの違いを超えた現場の教師同士の研究が鍵になると考えていました。

先行きは不透明でしたが幸い豊島区教育長、教育委員会、校長会それぞれの了承をいただき、参加を認めていただきました。公立学校とは授業時間の体制が異なるため、公立校のような参加が難しくはありましたが、教師からは私立学校である本校に新しい風が入ると喜ぶ声が多く聞かれました。一人1台のタブレット端末を2013年から段階的に進めてきた本校の先進的な情報教育の参観に、区内のI小学校の全教師が訪問してくださったときには本校教師も公立校との新しい関係が生まれたことを大いに喜びました。

また視野を広げ、授業改革に向けた取り組みを長年続け大きな成果を上げ、全国から参観者が多く訪れる学校への出張を勧めました。私自身も長年学び合いの授業研究のために訪問していた茅ヶ崎市立H小学校に、新たな思いで数名の教師と参加しました。参加した教師からは、直に授業改革の様子と出会い、1日でそれまでの考えが書き換えられるほどの衝撃を受けたと報告を受けました。その教師はそれ以来さらに子どもたちの学び

合いを中心にした授業改革を積極的に進め、大変頼もしく思いました。そのほか奈良県、静岡県、神奈川県などの改革先進校の研究会などには毎年教師が参加し本校の授業改善に大きな役割を果たしました。教師の必要に応じた学び合いの継続こそが、少しずつでも授業改善、改革の前進につながることは間違いないと改めて確信しました。

### ③学習発表会の革新

保護者に対して、毎年行われていた学習発表会の機会を用いて、子どもたちの学び合いや子どもが主役の授業に向けた本校の教育改革の現状を知っていただくために、学びの共同体の一員として、授業参観から授業に参加するようにお願いしました。学びの様子は教育改革を端的に示すために「主体的な学び」単元を2年生以上で実施しました。

「主体的な学び」単元は公立学校で行っている総合的な学習の時間と類似したものです。近年本校では総合的な学習の時間の学びの中心を全学年で行っている宿泊行事をテーマとして取り組んでいました。立教学院の所有している山荘で行われる宿泊行事に関して、事前、実施中、事後の学びを教科横断的な探求学習として位置づけ、子どもたちで作り上げる行事として総合的な学びを実施してきました。最終学年の6年生になると、それまでの山荘での宿泊学習の集大成として一般のキャンプ場で2泊3日過ごします。期間中のほとんどのプログラムは、子どもたちが事前に話し合い決定します。食事のメニューも各学級ごとに事前に話し合われ自分たちで調理して食べるので、給食とは違う楽しみを味わっているようでした。このように自前の山荘での宿泊行事を中心とした特色のある総合的な学習の時間は大変意義深いものです。

しかし、どうしても中心となる活動が固定化しているために、子ども自身の探求の広がりや教師の総合的な学習の時間における指導経験の広がりに限界が見られました。そこで、より日常の学習の側に探求学習を設定することが重要と考えました。与えられ、課せられる「勉強」から、テーマ

自身を子どもたちが決定し、学び合いを通して探求したことが、誰かに、何かに貢献できるような学びの経験が、友と一緒に賢くなり、自らの成長を喜び、役に立つ「学び」への転換を図るために本校にはぜひ必要だと考えたのです。単元立ち上げのための諸問題を討議し、解決しながら最終的に会議での承認を受け、特別枠で設けられた「主体的な学び」単元が始まりました。

テーマは子どもたちの実態により学級ごと、学年ごとで自由に選択することにしました。学年の教科学習を土台にしてテーマが生まれたり、国内の様々な実践や現在世界中で問題になっているテーマに取り組んだり、内容は様々でした。時間を重ねるごとに子どもたちの集中度、熱中度は高まり、教師の関わり方も試行錯誤しながら上達していきました。

この「主体的な学び」単元の活動を学習発表会において全学級で行い、そこに保護者にも参加を依頼しました。保護者には、事前に、今まさに継続している学びをご覧いただきながら、さらに子どもたちの探求が広がり、深まっていくような助言をお願いしたいと伝えました。当日は子どもたちの背中を見ているだけの従来の授業参観ではなく、子どもたちの横に寄り添ったり、正面で向き合って発表を聞いたり質問したりする保護者参加の授業が生まれました。子どもたちの探求に対するお褒めの言葉や、保護者の「もっと知りたい」の一言で子どもたちの探求をより質の高いものにしていく励ましの言葉やアドバイスなど、学びの共同体である学校の姿が見られました。

この「主体的な学び」単元の学習は、常に与えられた課題をこなすことが学習だと思っていた子どもたちの考えを今まで以上に変化させるきっかけにもなったようです。強制的な宿題のほか、以前から本校で進めていた「自学」が活性化してきたのです。自分の興味のあることを突き詰めて調べたり、友達の「自学」から影響を受けて学びの視野を広げていく子が増えてきたとの報告を受けました。最高学年では学級の枠を超えて全員の「自学」を公開し共有を可能にしていました。教師は子どもたちの学びに向か

う力、互いに助け合う力を決して過小評価してはならないことを本校の子どもたちが教えてくれました。

#### 4 おわりに

子どもは学ぶことが決していやではないのです。学びに伴う少しぐらいのつらさは軽々と乗り越える力を持っています。そばに友がいて、見守る教師がいて、いつも微笑んでくださる神さまがいらっしゃることを教える学校ならば、その力は無限大に発揮されます。

恐れることなく自分のよさを発揮し、友のよさを認め互いに支え合う、子どもたちが主役の学校づくりは夢ではないのです。本校がキリスト教学校だからこそ大切にしていくこと、私立学校だからこそできることに今後も積極的に取り組み、他の私立学校だけでなく公立学校を含め子どもたちの幸せな学校生活を願い、困難を乗り越えて先頭を歩む気概をこれからも持ち続けてほしいと切に祈ります。

(前立教小学校校長・JICE 所員)

表 1

2020年度

立教小学校 道徳性の教育全体構想図

<p>○ 日本国憲法</p> <p>○ 教育基本法</p> <p>○ 世界人権宣言</p> <p>○ 児童憲章</p>	<p><b>立教学院教育目標</b></p> <p>キリスト教に基づく人間教育</p> <p><b>立教学院一貫連携教育目標</b></p> <p>テーマをもって真理を探究する力 を育てる</p> <p>共に生きる力 を育てる</p>	<p>○ 聖書</p> <p>○ キリスト教信仰</p> <p>○ 現代社会の要請</p> <p>○ 児童の実態</p>
<p><b>各教科における道徳性の教育指導方針</b></p> <p>（重点）すべての教科学習の中で、道徳性の教育に関わる側面を意識し、計画的に指導し、一人ひとりの児童の道徳性の向上を図る。</p> <p>○学び合う共同体としての発展を目指して学習方法や学習活動を常に工夫し、相互に協力し合い、励まし合う学習態度の育成に努める。</p> <p>○体験的、問題解決的な学びをデザインし、児童が学ぶ意義を理解するとともに、これからの自分にとっての意義を考えようとする学習態度を育てる。</p> <p>○自らの思いや考えを言葉で表す機会を増やすことを通して、他の人の思いを聴いたり、読んだりして相手の身になって理解する力を育てる。</p> <p>○主体的・対話的で深い学びをめざし、真理を探究しようとする意欲を高める。</p> <p>○豊かな感性を育み、美しいもの、崇高なものも尊重する心情を育成する。</p> <p>○記憶を重視した学習評価とともに、児童の自主的、創造的な学習活動を積極的に評価する。</p>	<p><b>道徳性の教育推進の基本方針</b></p> <p>○感謝をもって礼拝に参加し、聖書の言葉を聴く児童を育てる</p> <p>○キリスト教学校の教育課程、人的、物的環境、言語環境等すべてを通して児童の道徳性を醸成する。</p> <p>○一人ひとりの児童に寄り添い、弱さや悲しみ、感動を共有し、恵き合い、学び合う学び、支え合う生活を進める。</p> <p>○道徳教育研究部による資料提示、研修会、研究紹介</p>	<p><b>特別活動における道徳性の教育指導方針</b></p> <p>（重点）特別活動における「体験的な活動」「話し合い活動」を道徳性の指導と密接な関連をもたせ、それぞれの特質を生かしながら好ましい人間関係や規範意識を育てる。また、実践活動の中で必然的に生まれる道徳的価値について、その意義を自覚し、さらなる実践意欲の醸成に努める。</p> <p>【学級活動】</p> <p>学級集団の一員としての自覚をもとに学級、学校生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図り、実践する。また、話し合いをもとに一人ひとりの児童が自己決定したことに基づき、強い意志で努力し、よりよい自分へと成長しようとする意欲を高める。</p> <p>【学校行事】</p> <p>学校生活に秩序と変化を与え、集団への帰属感を深める。異学年児童と協力することで信頼、思いやりの心を育む。</p> <p>【児童会活動】</p> <p>異年齢の児童同士で、学校生活の充実と向上を図るための課題の解決に向けて、自主的、実践的に取り組み全校児童に役立っ経験を得る。</p>
<p><b>特色ある教育活動方針</b></p> <p>○全学年で実施するキャンプ活動に目当てをもって取り組み、協力、責任、公衆道徳、励まし支えあう体験を積み重ねる。</p> <p>○縦割り班活動において、高学年は低学年の面倒を見ながら責任、自律、思いやりなど、低学年は高学年の姿を手本としながら感謝、節度、友情などの思いをもちながら6年間を通して道徳性を養う。</p> <p>○ICTを活用した学びを進めるため、インターネットが持つ特徴などの理解を基に「情報モラル」の育成を図る。</p>	<p><b>各学年の指導の重点</b></p> <p>低学年</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お祈りに慣れる。</li> <li>・挨拶などの基本的な生活習慣を身に付ける。</li> <li>・よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを行う。</li> <li>・学校のきまりを守る。</li> <li>・一人ひとりの思いや考えが違ふことに気づく。</li> </ul> <p>中学年</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の言葉でお祈りする</li> <li>・善悪を判断し、正しいと判断したことを行う。</li> <li>・身近な人々と協力し助け合う。</li> <li>・集団や社会のきまりを守る。</li> <li>・友達のよいところに気づき、自分と異なる考え、意見を大切にする。</li> </ul> <p>高学年</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなとお祈りする。</li> <li>・相手の考え方や立場を理解し、多様性から生まれる視野の広がり価値を知り、互いに支え合う。</li> <li>・法やきまりの意義を理解して進んで守る。</li> <li>・自分のよいところを知り、学校、社会に貢献する。</li> <li>・世界に目を向け、各国の伝統や文化を尊重する。</li> </ul>	<p><b>生活指導の方針</b></p> <p>（重点）教師と児童、児童同士の心の交流、信頼関係の醸成に努める。また、児童相互の人間関係の基礎となる認め合い、学び合う関係を築くための機会を積極的に設ける。教師は「教える構え」から「児童の心を耕す構え」に重点を置く。</p> <p>○児童理解のために児童の声を「聴く」機会を場を設定し、内面理解を深める工夫をする。</p> <p>○基本的な生活習慣、規範意識の育成のため児童の創意を生かした活動場面を設定しきめ細かな指導を行う。</p>